板書スライドの問題を解決する授業設計とは

角南 北斗[*1]
Email: hello@shokuto.com

*1: 武庫川女子大学

◎ Key Words　教育現場のIT活用，PowerPoint，ノートテイキング

1. 板書スライドと黒板写メ

PowerPointなどのスライドツールで作成した資料を、プロジェクタとスクリーンを使って提示する。そうした手法は今やビジネスの現場では当たり前のものとなったが、最近は授業の板書にその手法を用いる教師も多くなった。授業中に板書の手書きを省けるため時間を効率的に使えること、板書を記録し再利用できることなどが、メリットとして挙げられる。

一方で教師が気をつけなければならないのは、授業展開の速度である。板書を手書きすることで自然と生まれていた隙間のような時間は、スライド切り替えによる資料提示ではほぼなくなる。それによって話のテンポが速くなりすぎて、学習者がついていけなくなる事態が起こりやすい。

そのこととも関連するのだろう。学生が黒板をスマホのカメラで撮影する、いわゆる「黒板写メ」が目にすることも珍しくなくなった。発表者の同僚教師は「黒板をパシャパシャ撮るなんて失礼だ」と問題視している。しかしながら、板書の内容を漏れなく正確・迅速に記録するという点では、撮影という手法は理に適っている。おまけにスマホという、学習者が日常的に携帯する道具で行なえ、かつ写真データだから管理や運用も容易となれば、これは実に優れた手法と言えるのではないだろうか。

確かに教師にとっては、授業中に自分（の背後にある板書）に向かってスマホを構えられ、教室のあちこちでシャッター音が鳴る、そんな状況を異様に感じるというのはあるだろう。一生懸命ノートを取っている姿と比較すれば、学習をさぼっているように感じるかもしれない。しかし、それは教師と学習者の習慣の違いによるもので、それを理由にするには感情論の要素が強い。

本発表で取り上げたいのは、黒板写メを非難する教師の「板書は写真で撮るだけでは学びにならない。手書きでノートに取ることによって理解が進むし、自分のものになる」という考えと、その実践方法である。発表者も、自身の学習者および教師としての経験から、こうした考え方には基本的に賛同の立場をとっている。しかし授業での実践において、単純に黒板写メを禁止し、手書きでノートを取りなさいと指示するだけでは、教師の期待するような深い理解にはつながりにくいという実感があるのである。

2. 板書スライドが妨げるノート取り

発表者は、一斉授業形式の講義でスライド資料を使っている。この手法を取り始めた当初は、学習者から「ノートが間に合わないから授業のスピードを落としてほしい」と言われることが何度かあった。そのあたりは留意して授業を進めていたつもりだったが・・と思い学習者の様子を観察すると、スライドで提示した情報を丸ごとノートに写すのに一生懸命、という様子であった。そこで、授業終了後にスライドデータを学習者に配布するようにした。

スライドの事後配布により、必死にノートに写す姿は見かけなくなったが、授業中に一度もメモを取らないような学習者が大多数になった。メモを取らないことが前提になると、事後配布するスライドが唯一の記録として扱われることになる。それがキーワードしか書かれていないようなものだと、復習の際に読み返しても意味が分からず、資料として機能しない恐れがある。それならば、なるべくスライドには説明文も盛り込むほうがいいだろう。そうしてスライドは毎回数十枚が普通になっていった。

こうした分厚いスライドが生んだプラスの効果として、授業を欠席した学習者が勉強しやすくなったことが挙げられる。学習者から質問があったときも「先週の授業のここ（スライドを指して）に書いてあるよ」と示しやすくなった。口頭説明の部分も事前にスライドに可視化する過程で練られるため、授業内容が安定し、展開も精緻化しやすい。

一方で、スライドがそれ単体で「見るだけで理解できるもの」に近づくほど、学習者がそれにツッコミをいれる余地が減っていきやすくなる。スライドを順に提示していく授業は、教師の用意した思考の流れに学習者をうまく乗せることが大切な、いわば紙芝居による説得である。聴き手の思考が横道に逸れないよう、情報の取捨選択や整理を徹底すればするほど、学習者が途中で疑問を持って立ち止まったり、別の視点で情報を再構成したりすることが難しくなる。つまり、学習者が「自分で考えてノートを取る」ことを妨げるような授業になってしまうのである。

3. ノート取りにつなげる授業設計

それでは、スライド資料はやめて従来の手書き板書にすれば、この問題は解決するのだろうか。スライドを事後配布する前の学習者の様子を考えると、手書きが可能な量の板書であればノートに模写し、不可能だと判断すればスマホで撮影する、そういう学習者が一定数出てくることが予想される。ノートを取ることは決して単なる記録作業ではない。ノートに書くべきなのは「スマホで撮れば済むような記録」ではなく「自分が情報を解釈し、より深く理解するためにそれを再構成し、自分なりの言葉に変換したもの」である。そうした意識が学習者になければ、問題は根本的には解決しないだろう。

発表者の携わる教育現場は大学や専門学校が中心のため、高校までの教育現場で「記録作業以上」のノートを取るスキルをどのように教えているのか、その現状は把握できていない。ただ、十数年前に教育実習生として高校の国語を担当したとき、学生から大真面目に「そのままノートに写せるような板書をするのは教師の義務」と言われたことがある。自分自身も高校時代であれば、そう考えたかもしれない。とすれば、たとえば大学教員が「最近の学生はノートひとつ満足に取れない」などと嘆くのは、少々無理がある要求ではないかと思われる。

通常の授業を行いながら、同時に「ノート取りのスキル」を学習者に身に付けてもらうには、どうすればよいのか。発表者は、ノートの取り方を教えるのではなく、学習者が自身の理解度を確認するような活動を授業に盛り込む、というアプローチを取っている。たとえば、専門用語を平易な言葉で学習者に説明してもらう、授業とは違う切り口で複数の概念を比較させる、スライドに問いや隙を多く盛り込む、といったことである。そうすることで学習者に、十分に理解できていない自分を発見してもらい、教科書やスライドやWeb検索などを通して納得がいくまで学び直してもらう。その繰り返しによって、教師の話をただ聞くだけではない、理解を深める作業に取り組む姿勢を身に付けてもらえないか。そのプロセスが、ノートの取り方を模写以上のものに変えるのではないか。そう考えて日々試行錯誤をしている。

板書を書き留める現実的な方法が手書きしかなかった時代は、その手作業を繰り返すなかで、特に意識せずとも情報の整理や再構成のスキルが身につく可能性が一定数あったのかもしれない。しかし現代は、黒板写メに代表されるような効率的な記録方法が他に数多くある時代である。書くことが記録作業以上のものだという認識が学習者になければ、それにまつわるスキルは簡単には育たない。目の前の学生が「ノートが取れない」のはなぜなのか、道具の進歩が図らずもヒントをくれた今こそ、学習のデザインを改めて考えるべきではないだろうか。

発表者について

角南 北斗（すなみ ほくと）。大阪府在住。

大阪大学大学院で日本語教育を学び、日本語教師を経てフリーランスのWebデザイナーに。日本語教育や情報教育の分野でWeb制作を行なうかたわら、大学や専門学校での授業、e-Learningプロジェクトのデザイン、研究発表などを行なう。

Portofolio: http://sunamihokuto.com
Blog: http://withcomputer.jp
Twitter: shokuto